八幡事業所 Tel.Fax 672-7595
sawayaka@eagle.ocn.ne.jp
小倉事業所 Tel.Fax 647-3210
sawayakakokura@violin.ocn.ne.jp
HP:http://www.npo-sawayaka.net/

さわやか

2022年10月26日
第３０９号

発行者
特定非営利活動法人
通院介護センター
さわやか

令和４年度

第１回理事会開催

十月七日（金）午前十時から、福岡県立北九州市勤労青少年文化センター（通称・北九州パレス）（小倉北区）第三会議室で特定非営利活動法人通院介護センター「さわやか」令和四年度第一回理事会を開催しました。

マスクの着用と手指の消毒等を徹底

今年も新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、マスクの着用と手指の消毒、部屋の換気及びソーシャルディスタンスを徹底して行ないました。

出席者が全員揃ったので、定刻より十分早く始めました。

初めに、山田理事長より開会宣言がありました。

続いて、資格審査委員に高原事務局長が選任され、理事総数五名、出席者数五名で定款の条項を満たしているので、この理事会は有効に成立する旨、報告がありました。

次に、定款に基づき議長に山田理事長が選任されました。

また、議事録署名人に梶原常務理事と高原事務局長が選任されました。

その後、審議に入りました。

初めに、貞谷事務局員より令和三年度活動報告、梶原常務理事より令和三年度収支決算報告があり、全て満場一致で承認されました。

続いて、山田理事長より令和四年度活動方針（案）、梶原常務理事より令和四年度事業計画及び収支予算（案）の提案があり、承認されました。

次に、山田理事長より十月二十九日（土）に行なわれる第十九回「さわやか」定期総会での役割分担と今年は、役員改選の年であり、全員重任することについて提案があり、承認されました。

以上で、理事会の議案すべて審議が終了し、午前十時三十分に閉会しました。

秋の読書週間について

読書週間とは、十月二十七日から十一月九日までの二週間にわたり、読書を推進する行事が集中して行なわれる期間のことです。

最近では、本を読む習慣が少なくなり、特に二十代の若年層に読書離れの傾向が見られています。

また、若年層はスマートフォンやタブレットなどの電子書籍アプリを使っている方が多くみられます。

たまには、電子書籍アプリではなく、紙媒体の本を読んでみませんか。

井戸水で透析　台風十五号で断水
静岡のクリニック　近隣にも水提供

二〇二二年九月二十三日（金・秋分の日）午前九時に四国沖で発生した台風十五号に伴う静岡市清水区での大規模断水は、市民の暮らしを支える医療機関や福祉施設を直撃しました。

井戸水を使い人工透析を継続

清水区七ツ新屋の杉山クリニックは、敷地内でくみ上げた井戸水を使って腎不全患者たちへの人工透析を継続しています。

透析には、大量の水が必要で、杉山寿一院長は普段通りの医療を提供できることに胸をなで下ろしながらも「大規模災害への備えをもっと真剣に考えなければ」と話しました。

清水区で三十年ほど、透析医療を担う杉山院長は、二〇一六年にクリニックを現在地に移転新築した際、井戸水を使う近隣住民の姿が目に留まり、敷地内に井戸を掘ることにしました。

移転当初は水道水からの代替も考えたが、井戸水は鉄分などの水質が異なり、通常の透析には使っていません。

しかし東日本大震災では水不足で透析患者の移送が困難を極めました。

このため杉山院長は「災害時には役立つはずだ」とひそかに考えていました。

クリニックには週三回の透析が必要な患者さんが約一五〇人が通っています。

台風で診療継続が困難になった近隣の医療機関から十五人ほどの患者を受け入れています。

近くの住民にも生活用水として提供しています。

杉山院長は「今回は水道以外のライフラインに大きな問題はありませんでした。

大震災の場合は、電気やガスの寸断、スタッフの確保など様々なリスクがあります。

もっと検討が必要だと再認識しました」と力を込めました。

透析に限らず、医療の継続に水の供給は不可欠です。

県の災害派遣要請を受け、自衛隊の給水車が九月二十六日以降、清水区内の病院や特別養護老人ホームなどへ派遣されています。

（九月三十日現在）

（インターネットより参照）

今冬は新型コロナウイルスとインフルエンザの同時流行の恐れ

新型コロナウイルス感染者の減少傾向が続いていますが、秋から冬にかけてインフルエンザとの同時流行が懸念されます。今冬のインフルエンザ流行を予測する一つの指標とされるのが日本と季節が逆のオーストラリアの感染状況ですが、コロナが流行するなか、インフルエンザの流行が過去五年を超えるレベルとなったからです。

オーストラリアでは過去五年を超える流行

季節が日本と反転する南半球のオーストラリアの感染状況は日本での流行を予測する一つの指標となっています。

オーストラリアの今冬のインフルエンザ患者数は、二〇二〇年と二〇二一年は少なかったものの、二〇二二年は秋に当たる四月から感染が始まり、初冬に当たる六月には二〇一九年を超えるほどの急拡大をしました。

四月からのインフルエンザの週毎の報告数は過去五年間の平均を超えるものでした。

その理由としては、

①新型コロナウイルス流行で感染症対策が徹底されていた過去二シーズンにインフルエンザの感染者が減ったため集団免疫が低下した

②今シーズンでは行動規制がほとんど撤廃され人流が増えた

などが挙げられます。

オーストラリアの流行では、A香港型が多く検出され、日本の今冬でもこのタイプが主流となる可能性があるとされます。

A香港型が流行すると、インフルエンザによる死亡や入院が増加することが知られています。

社会全体のインフルエンザに対する集団免疫が低下

日本もオーストラリア同様、過去二年間インフルエンザの流行がみられず、患者数が圧倒的に少なかったことから、社会全体のインフルエンザに対する集団免疫が低下していると考えられます。

そのため、一旦感染が起こると、社会全体として大きな流行となる恐れがあります。

また、今年はRSウイルスや手足口病など新型コロナウイルス以外のウイルス感染症も増えたことからもインフルエンザの増加の可能性が指摘されています。

新型コロナウイルス対策を政府にアドバイスする専門家組織は、今年の年末年始にかけて新型コロナウイルスとインフルエンザが同時に流行する可能性に懸念を示しています。

こうしたことから、日本感染症学会では、今季も小児、妊婦も含めて、接種ができない特別な理由のある人を除き出来るだけ多くの人に、インフルエンザワクチンの積極的な接種を推奨しています。

とりわけ、ワクチンが必要なのは、六十五歳以上の高齢者や五歳未満の子ども、心臓や肺などに慢性の持病のある人、悪性腫瘍で治療中の人、高度の肥満者としています。

インフルエンザワクチンの効果が持続する期間は接種後二週間から五ヶ月といわれています。

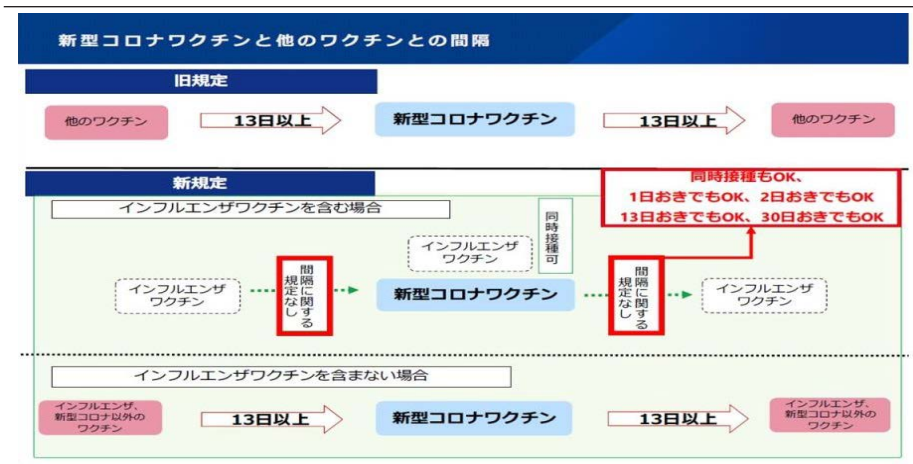
新型コロナウイルスとインフルエンザワクチンの同時接種を推奨

政府は、新型コロナウイルスとインフルエンザワクチンの同時接種を推奨する方針です。

新型コロナウイルスワクチンとインフルエンザワクチンとの同時接種については、単独で接種した場合と比較し、有効性（抗体価への影響）及び安全性（副反応への影響）は劣らないとの報告が出されています。

なお、新型コロナウイルスワクチンとインフルエンザワクチン以外のワクチンとの同時接種については、引き続き十三日以上の間隔をあける必要があるとされます。

（インターネットより参照）



今一度、感染対策を徹底しよう！

重複感染は日本では未知の状態ですので、怖い気持ちもあるかと思います。

【マスク】、【手洗い】、【うがい】【消毒】【三密の回避】といった感染対策を行うことはとても効果的な感染予防となります。

そろそろ感染対策に疲れてきたという方も多いとは思いますが、特に冬になるにかけてはインフルエンザの予防も必要ですので今一度、感染対策を徹底しましょう。

（インターネットより参照）